

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この場面の山は「敬語で主語を見分けること」と「熊谷の心の揺れ」です。まちがえた設問は、同じ番号の傍線を本文で探して読み直してください。

あらすじ＝一ノ谷の戦い。源氏方の熊谷次郎直実は、海へ逃げようとする平家の武者を扇で招いて呼び止め、組み伏せて首を取ろうとする。ところがかぶとを押し上げて見ると、わが子ほどの年の、薄化粧をした美しい若武者だった。助けたいと思うが、うしろには味方が五十騎ほど迫っている。直実は泣く泣くその首を切り、武士として生きることの情けなさを嘆く。討たれたこの若者が平敦盛であった。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

熊谷（くまがへ）、「あはれ、大將軍（たいしやうぐん）とこそ^①見参らせ候へ。^②まさなうも敵にうしろを^③見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ。」と、扇（あふぎ）をあけてまねきければ、招かれてとつてかへす。

渚（なぎさ）にうちあがらんとするところに、おしならべてむずと組んでどうど落ち、とつておさへて首をかかんと、内甲（うちかぶと）をおしあふのけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧（うすげしやう）して、^④かね黒（ぐろ）なり。

わが子の小次郎（こじらう）が^⑤よはひほどにて、^⑥容顔（ようがん）（ようがん）まことに美麗（びれい）なりければ、いづくに刀を立つべしとおぼえず。

「そもそもいかなる人にて^⑦ましまし候ふぞ。名のらせ給へ、助け参らせん。」と申せば、「^⑧汝（なんぢ）はたそ。」と^⑨ひ給ふ。「物その者で候はねども、武蔵（むさし）の国の住人、熊谷次郎直実（くまがへのじらうなほぎね）。」と名のり申す。

熊谷、「あはれ、^⑩助けたてまつらばや。」とおもひて、うしろをきつとみければ、土肥・梶原五十騎ばかりで続いたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵（ぐんぴやう）雲霞（うんか）のごとく候ふ。^⑪

よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じくは直実が手にかけて参らせて、^⑫後（のち）の御孝養（ごけうやう）をこそ仕（つかまつ）り候はめ。」と申しければ、「ただとくとく首をとれ。」と^⑬ぞのたまひける。

熊谷あまりに^⑭いとほしくて、いづくに刀を立つべしとおぼえず、目もくれ心も消えはてて、前後不覚（ぜんごふかく）におぼえけれども、さてもあるべきことならねば、泣く泣く首をぞかいてんげる。

「あはれ、弓矢（ゆみや）とる身ほど^⑮口惜（くちを）しかりけるものはなし。武芸（ぶげい）の家に生まれずは、なにとてかかるうき目をばみるべき。なさけなうも討ちたてまつるものかな。」とかきくどき、袖（そで）を顔におしあててさめざめとぞ泣きゐ

たる。

語注 まさなうも＝よくない・見苦しい。うしろを見せる＝背を向けて逃げる。おしならべて＝馬を並べて。どうど＝どつと。内甲＝かぶとの内側。顔の見えるところ。かね黒＝お歯黒。歯を黒く染めること。都の貴族や上流の若者の身だしなみ。小次郎＝熊谷直実の子、小次郎直家。よはひ＝年齢。物その者で候はねども＝たいした者ではないが。土肥・梶原＝源氏方の武将、土肥実平と梶原景時。雲霞のごとく＝雲や霞のように数多く。よも＝（下に打消の言い方をともなつて）まさか。人手＝他人の手。御孝養＝死後の供養。仕る＝「す」の謙譲語。いたす。とくとく＝早く早く。目もくれ＝目の前が暗くなり。さてもあるべきことならねば＝そうしてばかりもいられないことなので。かいてんげる＝「かき（掻き）」のイ音便「かい」＋「てんげる」。「てんげる」は「てけり」（完了「つ」＋過去「けり」）が「てんげり」と変化した形の連体形で、係助詞「ぞ」の結び。切ってしまった。うき目＝つらい思い。かきくどき＝同じ嘆きを繰り返して静かに泣くさま。

A 語句の意味と読み (1～6)

- (1) ② 「まさなうも」の「まさなし」の、ここでの意味を書け。
- (2) ④ 「かね黒(ぐろ)」とはどのようなものか、書け。
- (3) ⑤ 「よはひ」の読みと意味を書け。
- (4) ⑦ 「ましまし」の終止形と、ここでの意味を書け。
- (5) ⑭ 「いとほしくて」の「いとほし」の、ここでの意味を書け。
- (6) ⑮ 「口惜(くちを) しかりける」の「口惜し」の、ここでの意味を書け。

B 文法 (7～12)

- (7) ② 「まさなうも」の「まさなう」は、もとはどのような形か。またこの変化を何というか。
- (8) ⑨ 「とひ給ふ」の「給ふ」は四段活用・下二段活用のどちらか。またそこから分かる敬語の種類を書け。
- (9) ⑩ 「助けたてまつらばや」の「ばや」の文法的意味と、直前の語の活用形を書け。
- (10) ⑪ 「よものがれさせ給はじ」の「よも」は文末のどの語と呼応しているか。またその組み合わせが表す意味を書け。
- (11) ⑫ 「後(のち)の御孝養(ごけうやう)をこそ仕(つかまつ)り候はめ」の「め」は、どの助動詞の何形か。また意味を書け。
- (12) ⑬ 「ぞのたまひける」の「ける」の活用形を書け。またそうなる理由も書け。

C 主語・指す内容・敬意の方向 (13～17)

(13) ①「見参らせ候へ」の「参らせ」は何敬語か。また誰から誰への敬意か書け。

(14) ③「見せさせ給ふ」は何敬語か。また誰から誰への敬意か書け。

(15) ⑨「とひ給ふ」の主語は誰か。そう判断できる決め手も書け。

(16) ⑬「ぞのたまひける」の「のたまふ」は、誰から誰への敬意か。①や③との違いにもふれて書け。

(17) ⑫「後(のち)の御孝養」とは、誰のための、どのようなことか。

D 口語訳 (18～21)

(18) ⑥「容顔(ようがん)まことに美麗(びれい)なりければ」を口語訳せよ。

(19) ⑧「汝(な)はたそ」を口語訳せよ。

(20) ⑩「助けたてまつらばや」を口語訳せよ。

(21) ⑪「よものがれさせ給はじ」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ④ 「かね黒（ぐろ）」や「薄化粧」という描写から、この若武者がどのような人物だとわかるか。四十字以内で書け。

(23) ⑥ 「容顔（ようがん）まことに美麗（びれい）なりければ」のあと、熊谷は「いづくに刀を立つべしとおぼえず」（どこに刀を刺してよいと思われない）という状態になる。熊谷が刀を刺せなかったのはなぜか、本文の語句を二つ以上引用して説明せよ。

(24) ⑫ 「後（のち）の御孝養（ごけうやう）をこそ仕（つかまつ）り候はめ」とあるが、熊谷がこのように申し出たのはなぜか。直前の本文をふまえて説明せよ。

(25) ⑮ 「口惜（くちを）しかりける」とあるが、熊谷が武士である我が身を情けないと嘆いたのはなぜか。説明せよ。

F 文学史・思想 (26～28)

(26) 『平家物語』のように、戦いを中心にえがいた作品のジャンル名を漢字で書け。

(27) 『平家物語』の冒頭「沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす」に示され、⑮のような熊谷の嘆きの根にもなっている、作品全体をつらぬく仏教的なものの見方を漢字二字で書け。

(28) 『平家物語』は、琵琶を弾きながら語り歩いた人々によって各地に広められた。この語り手の呼び名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①主語で迷ったら敬語を見る。「させ給ふ」「のたまふ」など尊敬語がつく動作の主は敦盛、「参らす」「仕る」とへりくだるのは熊谷。「汝はたそ」「ただとくとく首をとれ」はどちらも敦盛の言葉。 ②係り結びは五か所。「こそ…候へ」「こそ…候はめ」は已然形、「ぞ…のたまひける」「ぞ…かいてんげる」「ぞ…泣きゐたる」は連体形。こそだけ已然形、と覚える。 ③「いとほし」＝気の毒だ、「口惜し」＝情けない。現代語の「いとおいしい」「くやしい」で訳すと×。「まさなし」＝みっともない、「よはひ」＝年齢もセットで。